

SHINGON HORONIC

色 は 匂 へ ど

IRO

WA

NIO

E

DO



特集 小菅たけ子が語る

北大路魯山人の世界

平成十年睦月一日発行

巻五



若
水

新年を迎えるときには

すべてのものが新まります

光も気も風も大地も

そして水も

若水を汲む

新しい歳の元旦に汲む水

水はいのちの源です

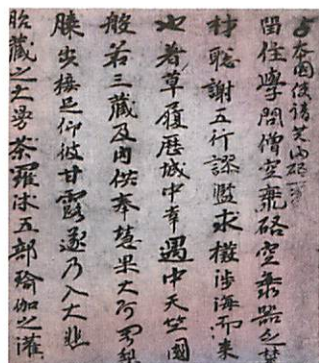
若水とともに

新しい年を迎えましょう



7

特集
北大路魯山人
の世界



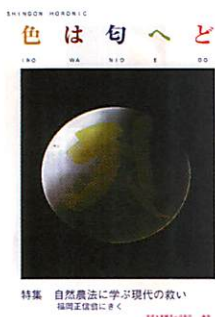
5

飯島太千雄
書聖空海の魅力



3

日本の心と形



17

色は匂へどこの一年



15

西宮 紘

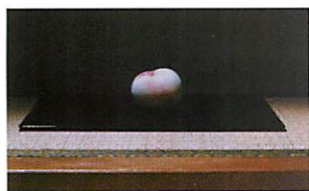
真言密教への誘い



13

現代の道しるべ

岩垂好彦



18

お年玉プレゼント

日本の心とかたち

日本の「こころ」と形



根引きの松

年あらたまる

あたらしいたましいになることが

あらたまるです

新年は「お歳さま」という神様が

あたらしい天地のエネルギーを運んできます

「お歳さま」に来ていただく依りしろが

門松や松飾りです

根引きの松はとくに山全体の新しい気をも

運んできます



日光 月光（椿 侘び助 伴半）

日月はもつとも身近な

天体です

明という漢字も 日月の姿

そのままをうつしたものです

真言密教では

左目に太陽を觀じ

右目に月を觀じて

みずから光を放って道場に

入ります

日月は闇を開き

新たな宇宙の始まりです

占本國使請其內經

留住學問僧空齋硃空齋器之楚

材聰謝五行認監求樣涉海而來

也著草履歷城中幸遇中天竺國

般若三藏及內供奉慧果大阿闍梨

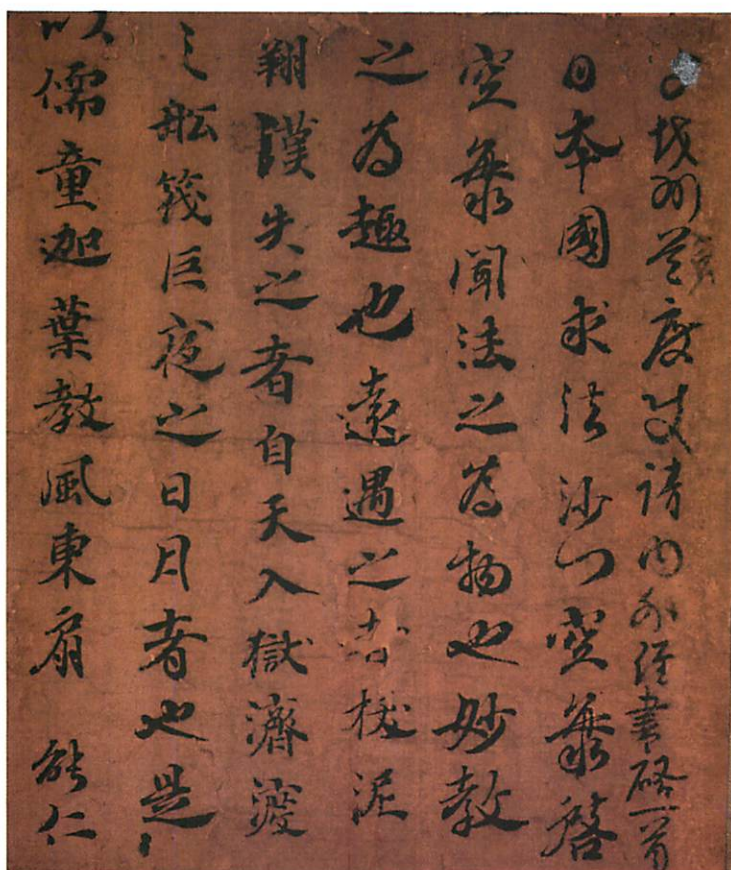
膝尖接足仰彼甘露遂乃入大悲

胎藏之大曼荼羅沐五部瑜伽之灌

与本国使請共歸啓（ほんごくのつかいにあたえともにかえらんことをこつけい）

書聖空海の魅力

飯島 太千雄



「越州帖」
えつしゅうちょう

前号で新資料「越州帖」を紹介しましたが、今回は「越州帖」の出現によってとても大切な問題が判ってきましたので、それについてお話しします。

空海^{くわかい}の思想や人間像を知るうえで最も重要なのが「性霊集」^{しやうれいしゅう}です。「性霊集」には、弟子の真済^{しんさい}の序文がついていて、彼が空海の文が散失するのを恐れ、その控文をとり編集したと書いています。これが今でも定説となっています。

ところで「越州帖」の第一行目には「与越州節度使請内外経書啓一首」と書かれています。この本文とは全く異なる行草書は表題ですから、本来の啓書にあるべきものでなく、後から書きこまれたものです。そしてこの表題は、「性霊集」のと同じし、しかもこの筆蹟は明らかに空海の、例えば「三十帖冊子」の第四帖と一致します。

ということは、真済でなく空海が自ら「性霊集」の控文をつくり、個々の表題をつけたことになります。それを裏づけるもう一つの資料があります。宮中深く秘蔵された「国使帖」です。この首行にも同じ書風で「与本国使請共帰啓一首」と書き加えられています。これ又、「性霊集」の表題で、かつ空海の真蹟なのです。

こうしたことから、実は「性霊集」は、空海の構想、指導のもとで真済が編んだのだと判ってきました。しかし、これを論証するには、「越州帖」と「国使帖」が空海の真蹟であることが前提となります。ですから、書蹟の研究がいかに重要か、という一例でもあります。

特集

小菅たけ子が語る

北大路魯山人の世界



「料理というのは材料のいのちと作る人のいのちと。

食べるひとのいのちが一つに結ぶついたとき

最高の美最高の芸術になる。」魯山人

北大路魯山人は陶芸、料理、書など何れの分野でも非凡な才能を見せた。しかしその才能の開花は三十代後半からだ。星岡茶寮で魯山人の料理に学んだ小菅たけ子が語る。

私は信州で生まれて、いろんなことがあって上京したいと思っていました。ただ上京してもダメですから自分なりに調べて、ぜひ魯山人のところへ行こうと決めました。

魯山人は当時、赤坂で星岡茶寮を開いていました。かれは芸術的に非常にすぐれた素質の持ち主であったことはもちろん、神道や仏教にも通じた魅力的な人だと思ったんです。

幸い兄がその会員になっていましたからすぐに面接できました。

「努力をすること、そして要求しないことだ」とギョリとした目で私に言いました。これが最初の言葉です。そして

「君には最高の仕事をやるからいつからでも来なさい」というので翌日から住み込みで働くことにしました。この最高の仕事というのが下足番。ちよつとがっかりしましたら

「人の足下を見るといふように大切な仕事なんだ」と言われました。

魯山人が浜田庄司、バーナード・リーチと三人で開いた巨匠展に出品した湯呑み



星岡茶寮は魯山人がおよそ考えられる限りの最高の料理で、時の一流といわれる人々をあつと云わせてやろうということで始めたんです。

「料理というのは材料のいちと作る人のいのちと食べる人のいのちが結びついていなくてはいけない。それが一つに結びついたとき料理は最高の美、最高の芸術になるんだ。」

といわれました。

「料理にも要訣、奥義といったものがある。およそ一つのを完成させようとするときに共通した一つの道だ。それは真心を込めること。」

天才的な感性で真の食道楽を完成させようとした魯山人の言葉は妥協のない厳しいものです。

「世間の人間は自分の身近にある有価値（美味）なものを利用するのに無頓着のようだ。」

「出盛りのさんまより場違いの鯛をご馳走と思ってる。」



自然の美しい色

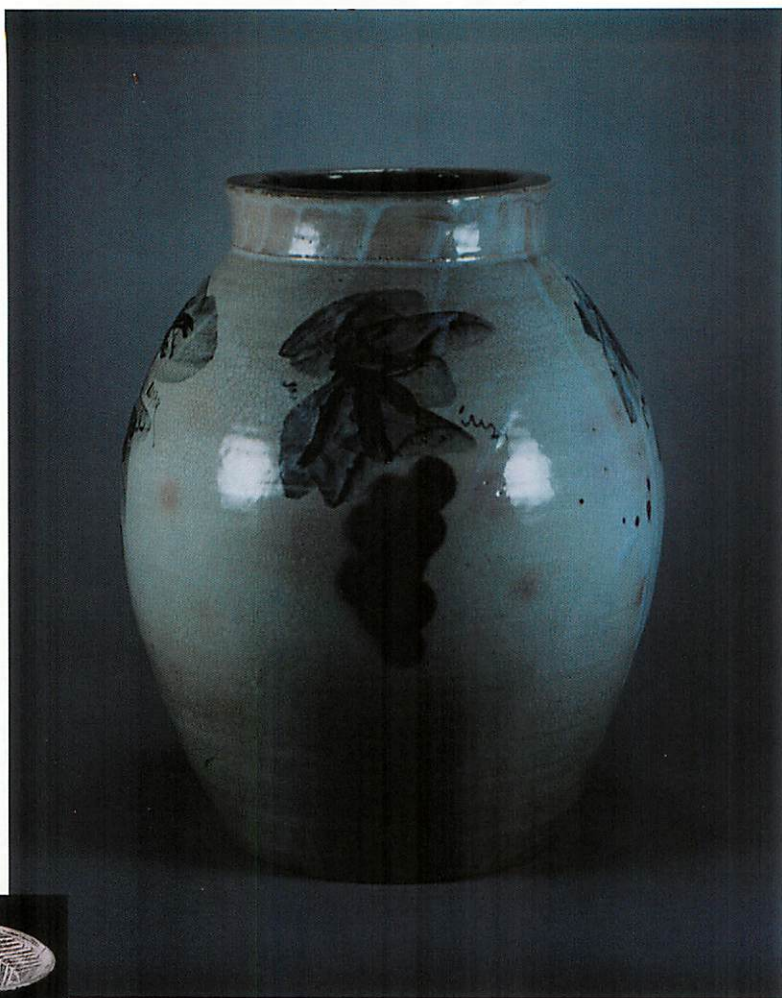


自ら山で採った草木で絹を染める



機を織る小菅さん

小菅さんは魯山人の教えをもとに 正しい食のあり方の普及に勤める
また美しい着物を一年にひとつ織りあげる 九十歳を越えるがとても若々しい



呉須辰砂葡萄文大壺



はけ目模様抹茶茶碗 魯山人快心の作

世間の人の思い違いを厳しく指摘しますが、料理人に対するときはまた一段と厳しさ増しました。

「味覚の天才というのは料理職人にはないようだ。料理道という『道』もない。鋭い五感も働いていないし責任がない。」

「料理道楽、食道楽というものを金を使って味わったことがない。たまには床柱を背に大尽振る舞いの経験をするのも大切なことだ。」そして

「美食にあらざれば口にしないという見識を備えていない。」

「ほんものの料理に味の素は不可。」

「菜は新鮮入手を努力せよ。」

味の素はその当時まだ一般家庭には普及しておらず、料理屋が家庭ではまねのできないうま味をつけるかくし味として使用していました。魯山人はかりにもプロの料理人がそういうものにたよって客の舌をごまかそうとする姿勢を嫌悪したのです。

野菜も新鮮なほど良いというのは誰でも知っていますが、採れたての野菜の味が時間が経つことによってどのように変わりを失っていくかを自分の舌で知っている人は少ないでしょう。魯山人はそれがわかっていましたから野菜は料理する三十分前に畑から採って洗って煮るという行為が間断



なく進むことを理想としました。

「私が美味い不味いを口にすると贅沢を言っているように聞こえるようだがそうではない。料理は材料を生かすも殺すも考え方一つ、材料を生かし美味しくたべるそれが経済にもつながるということだ。」

「金の使い方上手下手があるように料理も同じで、大根一本、魚一尾も道理にかなった用いかで美味しい料理となる。しかし無知と不精で下手なことをすればなんの値打ちもないもつたないものになってしまう。」

「日に三度つきまとう食事だからこそ真剣に考えなければならない。」

「美味しい不味いの区別がよくわかることは結局ものを殺さないことになり、それが人生の幸福につながる。」

料理を盛りつける器に対しても魯山人は非常に鋭い感性と並大抵ではない意欲をもっていました。

「食器は料理の着物である。せっかく作った料理もそれにふさわしい食器に盛らなければどうにもならない。料理と食器が一致調和したときに味わうものに快感が生まれる。」



白身の魚に葛の衣をつけて揚げた琥珀揚げは魯山人が好んで作った料理の一つ



小菅さんが染め織りあげた着物にはファンが多い

生きる

小菅たけ子さんは1908年信州に生まれ、魯山人のもとで修行する戦後の混乱時は辛い時期が重なり、五歳と二歳そして乳児を抱いて死ぬよりしょうがないという思いの中で井の頭公園を憑かれたように歩いたことがあったそうだ。

「ふと気がついて足下を見たら、落ち葉の陰に毛虫がもぐっていたの。ああ毛虫はこんな落ち葉にすがって生きているのか、私は何にすがればいいのか。そう思っ、その木を見上げると小さな黄緑の色をした若芽が出てたの。ああ、みんな一生懸命生きているんだ。そうだ私も生きなくちゃ」

木の芽に命をいただいたという小菅さんは、正しい精進料理の普及に努めている



小菅さんの料理の本

「とんちん食」は月刊ナームに連載中

世田谷美術館で見られる魯山人

吉村 洪

私にとつての北大路魯山人の魅力は、その自由奔放さにありながら、次から次に異なった印象を与えてくれるので、見ているうちに混乱を生じるほどです。

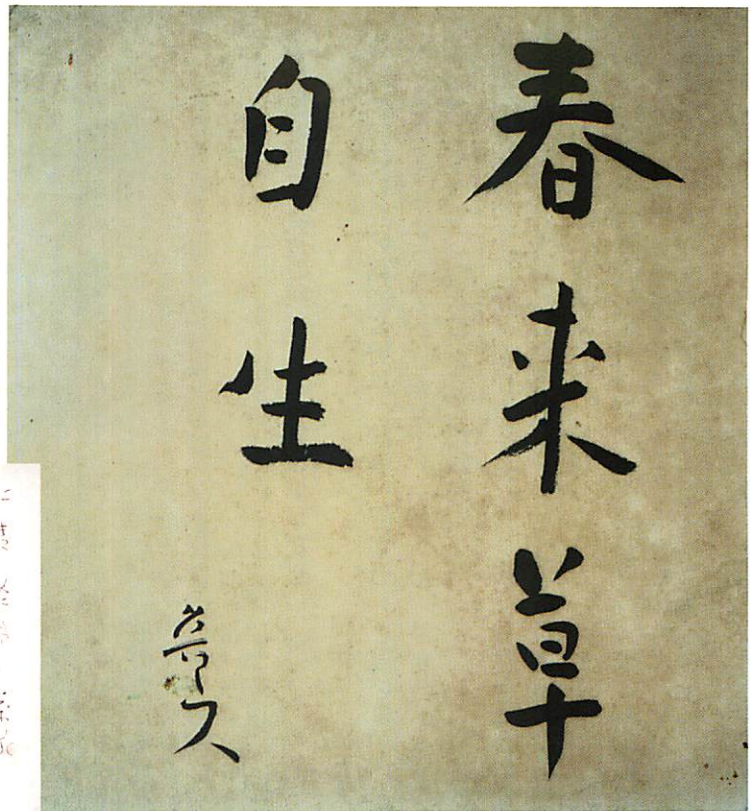
「色は匂へど」の第四号を送っていただいたお礼のお便りに、次号の特集では世田谷美術館所蔵の魯山人の作品についても取り上げてくださるよう書き添えたところ、逆に龍樹師から、それならどうぞ書いてくださいとのお返事を頂戴してしまいました。

そうなると、記憶に頼るだけではなんとも心もとなく、同美術館の常設展に足を運びました。ところが常設展は「絵画に読む物語と言葉」（平成9年度第2期収蔵品展）という企画展化されたものでした。魯山人の作品の展示は14点に過ぎず、よく見ようと考えるときた作品には出会えなかつたので、以下は展示中の作品に接しての感想です。

展覧会では、まず自分が手に入れたいなと感じる作品を見つけなさいと教えられてから、私はどこへ出かけてもこれを実行しています。今回特に気には入った作品は、かれがよく書にしたいという「春來草自生」の色紙と、これも色紙の「仁清の茶碗」の絵です。

前者は、並外れた私の強さの持ち主といわれたかれが、どうしてこのように素直でこだわりのない、しかもみずみずしい勢いを感じさせる書を書いたのかと不思議さを感じさせます。また後者は、目にしたまま感じたままを描くというのは、ちっともむずかしいことではないよ、実はこういうことなのだよと、かれが理屈でなく、生きたお手本を示してくれているように思えます。

魯山人が日常生活では、人間くささを丸だしにして、周囲との摩擦や衝突を繰り返し続けたのに、芸術に関しては、こだわらずとられずを实践した偉大な人物だったことを改めて深く感じさせられました。



現代の道しるべ

岩垂好彦

認められるということ



中学生のロボコンの記事を読んで、少し安心しました。

最近のマスコミの報道姿勢は、読者・受信者をagitateするようなものばかりで、一体、日本はどうなってしまうのか、と悲観的になってしまいます。

実は、私の学友（日本人）が、自殺しようと思いました。彼は私よりも年上で、既に一度スパン人（注）と結婚し、離婚しています。その離婚の仕方、相手がある日突然いなくなってしまう、という形だったため、本人の心に深い傷となって残っているようです。さらに、

彼自身、もともと自我が不安定な面もあるようなのです。その彼がこちらで恋人（日本人）を見つけたのですが、その恋人にも逃げられるかもしれない、という強迫観念のようなものがあるらしく、まだつきあって八ヶ月ほどなのに、結婚してくれ、してくれないなら自殺する、と言って、遺書を書き、包丁をもってバスルームに入った、というのです。

客観的に話しを聞いている限りでは、女性の方が結婚を決断できないのは自然なことで、彼の方が無理なことを言っているのは明白です。しかし、私自身も自我が不安定な人間であつたので、彼の気持ちはわかるような気がします。

現代は、人と人の付き合い方が難しい時代だと思えます。逆に言えば、それだけ人と人の付き合いがとて重要になつてきているから、ちよつとしたトラブルが心に大きな傷をつけることになり兼ねないのだと思います。

子供に対して愛情を表現できなかったり、子供をほめない親や教師が多いと思えます。友人達と真剣に協力しあつて何かを成し遂げる機会が少ないと思えます。

そうやって育つた子供は、自我が不安定になると思えます。私自身がそうだから、これは確かなことだと思えます。

ロボコンの中学生は、チームを組んで、成功したり失敗したりしながら、おたがいに叱咤激励したり、誉めあったり、なぐさめあったりすることを通じて、お互いを確認しあっているのだと思います。森先生は、「自分の分をわけてしまったのが自分ですよ」とおっしゃる。確かに、我々はもともと大きな宇宙の一部分に過ぎないわけで、根本的には自分も他人も同じ宇宙を構成しているわけです。しかし、私が問題だと思ふのは、その「自分」すら見えない、見えてこない教育や社会環境です。親にとつて自分とは。友人にとつて自分とは。そういうものがわからないから、自我が不安定になる。どんなに親しい人にも、本当のことを言えない。その結果、場合によっては人間不信で自殺したくなるのではないのでしょうか。

ロボコンの時、彼はよくやつた、自分の仕事をやるだけでなく、他人の分まで手伝つていた、他のチームの人が手伝ってくれて、ひとの優しさに触れることができた、やるべきことをやって、「日本一だ」と誉められた。：こういうことを通じて、ロボコンの中学生達は、ひととひとがこころのどの部分でつながりあっているのかを確認し、また自分に対し

て自信をつけているのだと思います。

ひとの幸福とは、誰かに愛されている、誰かに認められている、そういうことにあるのではないかと思っています。世の中が愛情で満たされるまで、それまでは、たとえひとに愛されなくとも、自分は他人を愛していこう、そういう強い気持ちをもって生きていきたいと思っています。（しかし実際にはいつもくじけそうになっていますが…）

友人の自殺未遂が、いまだに私の心を動揺させているようです。私だって、死にたいほどむなしい思いもしている。しかし、このむなしさを他人に対する愛情にかえて、生きていこうと思っています。

「憂きことのなほこの上につもれかし。限りある身の力ためさん」と。

まちには秋風がふいて、急速に冷え込んできました。ひとのころろは逆にあたたまっていくことを祈るばかりです。

<http://www.pitt.edu/~yoist2> 「在ニューヨーク」

読者からの手紙

弁護士 樋口和博



この度「色は匂へど」第四巻お届け頂き有り難く御礼申し上げます。

何と美しい写真を何と素晴らしいアレンジにされたことでしょう。素晴らしいの一語につきます。「蓮の葉に遊ぶ水滴は自由自在に動いてまた水面に帰る。生命の揺らぎを見ているよう。」感動を覚えます。

「お月さまにはのんのさまがいらっしゃるか」と言われ、みんなで手を合わせた昔の幼き頃が想い出されます。この頃は幼い児から手を合わせる心をとってしまったようです。

狂っているような事件多発の昨今のこと、子供達に手を合わせる祈る心を持たせないことが悪いのではないかと思います。ロボコンにより、協力すること、助け合うこと、集中することの素晴らしさを教えるという、ロボット博士の特集には大変興味を持ちました。こんなに素晴らしい本を出来るだけ多くの人達に是非読んで、観て頂きたいと思います。



導師の心曼荼羅、僧侶の声明、光、華、香参列者の心が一つにとける 万灯万華大法要

真言密教への誘い

西宮 紘 日本精神文化史研究者

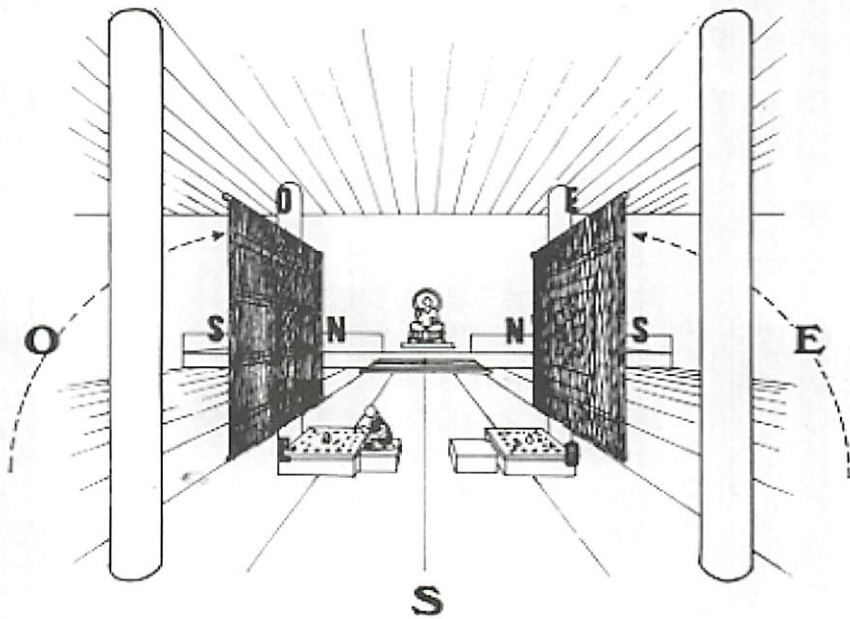
詩を口ずさんでいるのだが、その事は意識されず、私自身は何か波動のようなものになって、部屋中に広がり、開かれた窓の外の闇へと一体化していく。初めは肉体を脱落させるかのような痙攣が、そしてその痙攣は次第にゆるやかな波動となり、あらゆる存在の境界を自由に越えていくことが可能であった。私は、この時ほど世界を親密に感じたことはなかった。

密教では三摩地^{さんまち}すなわち仏菩薩^{ぼつかくい}の法界^{ほっかい}、あるいはその法界に入る方法論を重要視する。

特に、方法論としての側面を瑜伽というが、この瑜伽と真言との関係がかつてはよくわからなかったのだ。私にとっては、リルケの詩は一種の真言であったのだ。しかし、右に述べた経験は一種の恐怖を私にもたらした。法界はある境地であるが、やりようによつては魔界にも修羅界にも入ることが可能だと感じたからである。

かつて、湯川秀樹先生は、「ダイコトミー（二分法）ではだめだ、トリコトミー（三分法）でなければだめだ」とよく言われていたが、まさにトリコトミーこそ肝要なのだ。真言と真言を唱える者と法界との。顕教は釈迦の説法は法界そのものではない。禅は法界と自己の關係に注目するが、法界に直接入るやり方は極端に個人差があり、一貫

Orientation des deux mandalas dans le temple.



曼荼羅莊嚴図 (Le Bouddha Secret Du Tantrisme Japonais
Pierre Rambach SUKIRA)

性がない。ダイコトミはだめだ、というのが私の結論であった。

こうして、空海の著書群に対する私の新たな挑戦が始まった。しかし、今度は孤独ではなかった。何故ならば、神奈川県津久井町の無住寺に居を移した私は、「秘密曼荼羅十住心論」の読書セミナーを開始し、親しい人達と共に読み進むことができたからだ。一ヶ月に一度ではあったが、昼過ぎから夜中まで続いた。わずかに数頁しかすすまなかったが、わくわくするほど楽しかった。その結果が私の著書「空海―火輪の時空」(朝日出版社)であったのである。

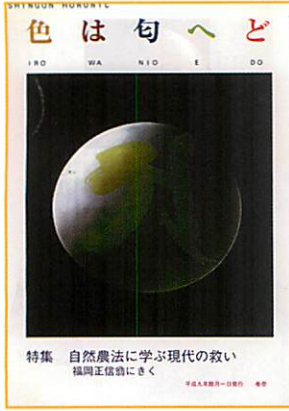
西宮 紘 (にのみや こう)

1941年2月17日生まれ
1969年 京都大学 理学部物理学科卒業

『空海―火輪の時空』 1984年 朝日出版
『縄文の地獄』 1992年 工作舎
『鬼神の世紀』 1993年 工作舎

現在、藤原書店から出版予定の『時空論』(仮題)
脳の問題から量子力学・相対性理論、宇宙論、
進化論、分子生物学、仏教等幅広い分野を時空
とその破れという観点から執筆中。

色は匂へどのこの一年



創刊号 特集 自然農法に学ぶ現代の救い

福岡正信翁がアジア／アフリカで実証してきた
肥料も農薬も使わない農法を紹介し現代の危機の
姿とそれに対する解決法を紹介

日本の心と形 五節句を祝う 稲玉

夢のお告げと大塔 平安時代宇多上皇の夢に現れたお大師の話

現代の道しるべ チベット密教絵画の意味するもの

やすらぎの空間 新刊紹介 空海密教



特集 飯島太千雄 書聖空海を語る

書によってその高い思想表現まで可能にした天才弘法大師
その書のマンダラ世界を繙く

新連載 鬼才 西宮 紘の真言密教への誘い

日本の心と形 端午の節句を祝う

子どもと楽しむ藍の生葉染め

現代の道しるべ

インターネットで届いた読者からの手紙



特集 染織家 吉岡幸雄 日本尾伝統色を語る

日本ほど色の名前を多く持つ国はない

古代紫の復元や東大寺お水取りに供える華を美しい色に染め
上げる吉岡氏の 色彩世界

特集2 大賀蓮 三千年の眠りから覚めた大賀蓮を特集

新連載 弘法大師の詩 書聖空海の魅力

子どもと楽しむ藍の生葉染め 真言密教への誘い

現代の道しるべ

新刊紹介 写経の古寺巡礼



緊急特集 ロボット博士 森政弘が語る

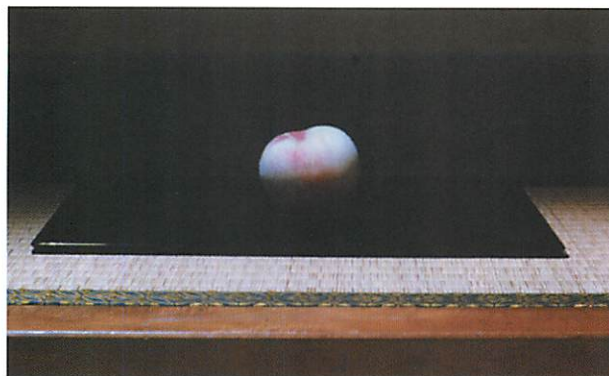
中学三年生とロボットコンテスト

マスコミの平面的な取り上げかたで自分たちの存在そのものが悪で
有るように感じた子どもたちが多かった。この特集では中学生の持
つ大きな可能性とそれを開く具体的な解決法を明示 大きな反響を
呼んだ

日本の心と形 月に祈るころ 真言密教への誘い 現代の道しるべ

書聖空海の魅力 弘法大師の詩

新刊紹介 生命の海（空海）宮坂宥勝 梅原猛共著



山中雪外 四季を生ける

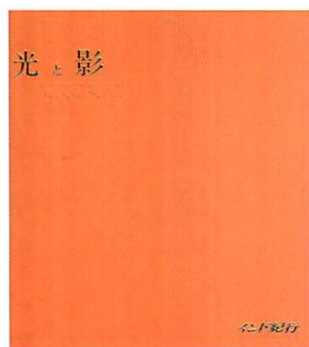
お年玉プレゼント



煎茶道を極め自ら多くの茶道具をつくりまた独創的な華を生けてきた、山中雪外翁が自身の集大成としての写真集を藤原先生に依頼

山中雪外 茶花の世界 四季を生ける

がこの度 装丁も美しく刊行されました
読者の皆様に抽選で三名の方にさしあげます
また インド紀行 光と影 を五名の皆様に



インド 光と影

ご応募宛先 〒158-0082

東京都世田谷区 等々力 3-15-1

満願寺内 色は匂へど編集部行き

お陰様で色は匂へども創刊一周年。大勢の皆様のお力添えをいただき、また読者の皆様から大きなご支援や激励をいただきました。とくに第四号ロボコン特集は二十冊、四十冊と希望される方があり、この本を出した意味があったと思います。バックナンバーは三号のみ若干有ります。ご希望の方はお申し込み下さい。二年目もより内容を充実して参ります。ご期待下さい。

EDITORS ADDRESS ryuju835@ra2.so-net.or.jp
www02.so-net.or.jp/~kukai168/



PHOTO SHU FUJIWARA (TUBAKI)

この本はツリーフリーペーパーで作られています
さとうきびから砂糖を取り出したあとの 残った繊維から作られています

次回発行は 3 月 1 日 予定
特集 西行の世界

Editor RYUJU ABE Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA Spescial Contributors/RYUICHI ABE KO FUJIWARA RYUICHI SATO
Editorial Staff/MIWA SAMURO TOMOKO MINOURA SEIRYU SATO KOJI TOKUMARU EISHIN TAKAHASHI REIKO SUDO KAZUFUMI MOTOYAMA
HOMEPAGE DESIGN MASAOKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA Printing KORINKAKU
PUBLISHER RYUBUN ABE EDITOR RYUJU ABE EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIIN S.H.C

〒158 東京都世田谷区等々力3-15-1 電話03-3705-1622 ファクシミリ03-3703-4979
Shingon Horonic Irowanioedo 第一巻第五号 平成十年睦月一日発行